

高齢者施設における自然体験プログラム実施の現状と課題

橋本 瑛梨佳 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 黒澤 毅

キーワード：高齢者施設、高齢者、自然体験プログラム

1. 序論

わが国における現在の社会問題として、少子化とともに、高齢化が1つの大きな問題になっている。そのため、特別養護老人ホームや老人保健施設の新設、多様な企業の福祉産業への進出など、社会が高齢者に様々な手立てをしようという流れになってきている³⁾。

そのような状況の中で、多くの高齢者施設がさまざまなレクリエーション活動やリハビリテーション運動を取り入れている。そうした中、石田²⁾は、キャンプ活動をはじめとする自然体験活動は高齢者に暮らしの豊かさが提供でき、非日常のときめきを感じることができると述べている。また、非日常的な生活や刺激は、高齢者に対して少なからず良い効果をもたらす³⁾ことが知られている。

そこで本研究では、高齢者施設における自然体験活動プログラム実施の現状と課題について明らかにし、これからの高齢化社会貢献への基礎資料となることを目的とする。

2. 研究方法

【対象施設】S県にある特別養護老人ホームの中から、30ヶ所を選んで対象とした。そのうち回答が得られた22ヶ所を有効回答数とした。

【調査用紙】特別養護老人ホームの代表者に、筆者が独自に作成した「自然とふれあうプログラムに関するアンケート」に記入してもらった。アンケートの内容は、「自然とふれあうプログラム実施の現状」、「自然とふれあうプログラム実施の目的」、「自然とふれあうプログラムを行う際の注意点と与えた影響」、「自然とふれあうプログラムの必要性と課題」であった。

3. 結果と考察

1) 自然とふれあうプログラム実施率

プログラムを「取り入れている」施設は20ヶ所で全体の91%、プログラムを「取り入れていない」施設は2ヶ所で全体の9%であった(表1)。

表1 「自然とふれあうプログラム実施の現状」の回答内訳

回答	施設数	比率
取り入れている	20	91%
取り入れていない	2	9%
合計	22	100%

高齢者にとって自然と触れ合うことは昔から馴染みのある活動の一つでもあり、高齢者が自然を通した活動を望んでいると考える施設が多いことが理由であった。また、その自然体験活動の内容は、「花見」、「紅葉」、「園芸」であった。施設で暮らす高齢者にとって身近な自然とふれあうプログラムになると考える。「取り入れていない」と答えた施設は、「入所されている方の要介護度が高く恒常的に行うことができない」、「入居者の日常把握をすることで余裕がなかった」が実施できない理由であった。

2) 自然とふれあうプログラム実施の目的

目的に関して、「気分転換」、「四季を肌で感じる」、「認知症の予防」が多く挙げられた。施設の中にいることが多い高齢者にとって、自然の中で活動を行うことは四季を肌で感じるができ、五感に刺激を与えることができると考える。また、何より気分転換につながると考えられていることが明らかになった。

3) プログラムを行う際の注意点と与えた影響

プログラムを行う際の注意点として、「体調管理」、「事故の防止」が多く挙げられていた。また、影響に関して「コミュニケーションのきっかけ」、「表情の変化」が多く、「自然体験活動を行うことで、日常生活であまり話さない高齢者も思ったことをよく口に出すことがある」という理由がみられた。また、表情に大きく変化がなくとも施設職員から見ていつもと違う表情によって効果があったと考えていたことも明らかになった。

4) 自然とふれあうプログラムの必要性と課題

「必要である」と答えた施設は19件で全体の86%、「必要だが行うことができない」と答えた施設は3件で全体の14%、「必要ではない」、「わからない」、「その他」と答えた施設はなかった。「人間として自然環境を無視しては、人間らしい生活を送れない」という理由から、高齢者にとって自然と触れ合うことは大切なことであり、四季の中で、時の流れや経過を実感することは五感に働きを持たせることができ、生きる力が湧いてくると考えられる。その中で、老人ホーム内での単調で刺激のない生活は痴呆症の進む原因になる³⁾ことから、自然とふれあうプログラムに必要性を感じていると考える。「必要だが行うことができない」と答えた施設は、高齢者施設で働くスタッフの数の不足が原因であった。高齢者が施設の中で生活をすることにに対し、「自然とふれあうプログラム」の必要性を理解した上で、スタッフを確保する必要性もあるだろう。

4. まとめ

1) 高齢者施設では、全体の91%にあたる施設が「自然とふれあうプログラム」を取り入れており、また、必要としていることが明らかになった。

2) 実施における課題として、施設職員だけでは人手が足りないことが挙げられた。そのため、地域との連携、ボランティアスタッフの増加、育成が必要であることが明らかになった。

引用・参考文献

- 1) 星知子, 小林聡, 神田房行 (2002): ハンディキャップのある人々のための自然体験プログラム, 環境教育研究 5, p. 17
- 2) 石田易司 (2005): 認知症高齢者キャンプマニュアル-いつまでも自然の中へ-, 明石書店, 東京 p. 1-31
- 3) 田中利明, 石田易司, 矢部京之助 (2003): 痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効用, キャンプ研究, 第7巻1号, p. 3